

研究結果

日清戦争の終結とともに締結された『下関条約』(1895年)は、日本、中国、台湾における文化交流の形式を一変させた。日本が中国大陸から文化を吸収するというそれまでの経路に反して、中国(清)側が数多くの留学生を日本に派遣した。一方、台湾は日本の殖民地となり、日本のすべてを受け入れることになった。このように、中国大陸も台湾も日本に強い影響を受けるようになってきている。そのような影響は常に文化の交流の先頭に位置する言葉にも強く反映されている。本研究は、19世紀末以後刊行された中日・台日及び日華・日台辞書の調査により、日⇄中または日⇄台という関係の中で、日⇄中関係の中で言語はどうやりとりされたかということを検討し、更には日中両文化がふれあう軌跡を観察した。

具体的には近年積み重ねてきた研究成果の延長として医学用語を出発点としている¹。日本には古来中国の漢方がもたらされ、台湾においては近現代の医療制度の基礎が日本の台湾統治により日本人主導で築かれたため、数多くの医学用語が日中両語において高い関連性を示したからである。医学用語の他、多くの分野における新漢語や日本の和字が、19世紀末以来刊行された中日・台日及び日華・日台辞書数十種に収録・使用されている様相についても検討した。

そのような研究成果は日本、香港、韓国、台湾といったいわゆる漢字文化圏において、研究論文、研究発表会(国際シンポジウム)、そして著書などの形で発表した。その詳細は文末の通りである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等) :

- ・王敏東*、蘇仁亮、「辞書に見られる異文化接触の軌跡—戦前における日⇄中辞書を通して」、The Seventh International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies, 2006年10月, 230-235頁, 香港
- ・王敏東*, 「新漢語の中日交流について—公衆衛生に関する幾つかの名称が台湾における使用状況を中心として—」, 漢字訳語と漢字文化諸言語の近代語彙の形成, 2006年3月, 62-69頁, ソウル

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等) :

- ・王敏東*、仙波光明、岸江信介、「新漢語と薬名—台湾における医学用語の一環として—」『言語文化研究 徳島大学総合科学部』, 2006年12月, 219-234頁。(日本)
- ・王敏東*、蘇仁亮、「日中同形語に関する一考察—医療機器の名称を例として—」『国語語彙史の研究』二十六, 2007年, 285-302頁。(日本)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等) :

- ・王敏東*, 『新漢語の逆輸入—台湾における医学用語を中心に—』, 致良出版社, 2006年4月, 1-377頁, ISBN957-786-355-8。(台湾)